

原発事故の悲劇を二度と繰り返してはならない!

原発事故さえなかったら失うことのない命がある。故郷が奪われ、家族がバラバラにされた怒りや悔しさこの13年を振り返り、原発事故に寄せられた人々の声を拾い上げ、特集として編集した。事故の教訓を忘れ、被害がなかったかのように原発推進に傾斜する国や東電の姿勢を看過することはできない。原発事故は終わってはいない。原発の過酷事故を風化させてはならない。



時とともに風化が進み、いつしか「あの時」のことが忘れ去られようとしている。いまなお、生活再建の渦中において苦悩する被災者の忸怩たる思いに触れる時、やりきれない焦燥感とともに、ふつふつと怒りがこみあげてくる。

着の身着のまま故郷を追われ逃げ回った日々、助けられた命も助けられなかった無念、放射能の恐怖と不安が付きまとう日々の暮らし、私たちは忘れない。

国策で進めた原発で重大事故を起こし、放射能汚染で故郷を奪い、生業を奪い、避難生活を強い責任、そして避難指示域をはるかに超えた地域の多くの人々を被ばくさせた責任は国と東京電力にある。

東日本大震災と東電福島第一原発事故から13年目を迎える今日、事故の教訓を忘れ、被害のなかったかのように原発推進に傾斜する国や東京電力の姿勢を看過することはできない。

帰るに帰れない故郷の地を想い、失った田畑、家屋への望郷の念、かけがえのない自然の海を穢し汚しながら進める廃炉。そして、健康を奪われることへの懸念を抱える日々を暮らす被害者にとって「復興」はまだまだ道半ばだ。

原発事故は終わってはいない。原発事故を風化させてはならない。国の政策の誤りによって再び人々が犠牲を強いられることがあってはならない。

私たちは忘れない。フクシマの悲劇を二度と繰り返させないためにも、原発事故の悲惨さを告発し続けたい。

— 福島原発事故被害から健康と暮らしを守る会 佐藤龍彦 —

＝ 原発事故は終わっていない ＝

警戒区域内で飼育されていた約3500頭の牛、3万頭の豚の過半数と40万羽の鶏が餓死、その死肉を野生化した飢えた犬や豚が食らう。それはまさしくこの世の地獄であり、死ぬほどつらい光景だった。「エネルギーは国家なり」の国策の歩みには、数知れない「人柱」の血と汗が染みついている。

双葉町で畜産農家を営んでいた女性が、夫の遺影を抱いて原発事故で住めなくなった自宅を訪れた様子を胸を打たれた。牛の慰霊碑の前で手を合わせる姿、餓死した牛たち、牛舎にあったたくさんの朽ち果てた牛の骨。安全神話はもろくも崩れ、人間はもちろん動物も犠牲になった。

今も復興は遠く廃炉への道は厳しい。原発事故を絶対に忘れてはならない。

— 新聞の投書より抜粋 —

＝ 帰るに帰れない故郷 ＝

東日本大震災から13年。原発事故で失われたものは何か、改めて私たちに問いかけてくる。津島地区は、阿武隈山系に囲まれた人口1400人の自然豊かな集落だった。大量の放射性物質が降り注ぎ、避難を余儀なくされた。今も大部分が帰還困難区域に指定されほとんどの住民は帰れないはまだ。

貧しい中で協力し合いながら山林を切り開いてきた歴史、伝統文化、豊かな北国の自然、そして温かな血の通った共同体の姿、四季折々の津島の美しい景色。

高度経済成長の名の下に水俣が犠牲を強いられ、本土の安全保障のために沖縄が犠牲を押し付けられている。そして今、エネルギー危機を名目に原発再稼働の流れが加速し、フクシマのことが忘れ去られようとしている。人々の人生を、家族を、共同体を破壊する原発事故。

人間にとって経済発展がそんなに大切なのか。人間が生きる上で根源的にもっと大切なものがある。原発事故はまだ終わってはいない。これだけの人々の人生が奪われたことを決して忘れてはならない。

— 故郷を奪われた浪江町 (毎日新聞) —

＝ 復興はまだまだ道半ばだ ＝

敷地内に並ぶ汚染水のタンクの群れ。高濃度のデブリにいまだに手も付けられず、使用済み核燃料さえ運び出されていない。放射能廃棄物を処理するために、より汚染された廃棄物を排出するその空しい作業に巨額の税金がつか込まれ、大手ゼネコンに流れる。再利用の名の下に汚染土を全国に拡散させ、国土を広く汚染させる。人々の命をないがしろにする空しい事業にどこまで税金を投じ続けようというのか。

— 毎日新聞 投書より —

原発事故による被害は、時間の経過とともにむしろ複雑化し、深刻になっている。帰還そのものを目的化した政策がすすめられ、被害者への賠償や支援が打ち切られ、終わってなどない被害を「終わったこと」にしようとする政策が暴力的に進められている。

現状を無視した復興は、この事故を引き起こした政府・電力事業者中心とした原子力推進体制の責任免除を進めようとしているとしか言えない。

原発事故は今も被災地の住民から「日常」を奪い続けている。

— 世界 2017年4月号 —